

猿 橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

社会性の基礎は「自己有用感」

校長 澁谷 一男

連日の雨は、咲き誇る花の色まで洗い流さんばかりに降り注ぐ。しかし、雨に打たれる紫陽花は、色あせるどころか、いよいよみずみずしさを増す。その姿は、誇らしく自身の存在感を示しているようにも見える。



児童玄関に並べられたプランターに、毎朝水やりをしている子どもたちがいる。環境美化委員会の子もたちだ。当番を決めて忘れずに行ってくれているのだが、日差しの強い日は、じょうろの水だけでは足りないことがある。そんな日は、子どもたちがやってくれた後、こっそりホースで補充してやる。

ある日、いつものようにホースで水やりをしていると、その日の当番の子がやって来た。「しまった、今日は出番がちょっと早すぎたか・・・。」校長に自分の仕事を奪われ気落ちするかと思いきや、その子は私の姿を認めると、「校長先生、ありがとうございます。私たちは中庭の花壇の水遣りをしに行きます。」と笑顔で通り過ぎていった。心の中を一陣のさわやかな風が通り抜けたようだった。

情報委員会の子もたちが校長室にやって来た。廊下に貼ってある合言葉「ともに きらきらがやこう」が日に焼けて色あせているので作り直してもよいかと言う。よく気が付いたと褒め、是非にとお願いした。

数日後、出来上がったものを見て驚いた。一枚一枚の文字に、貼り絵のように細かく切った色紙を丁寧に貼り付けてある。パソコンで作った元のものよりはるかによい出来映えだ。その完成度の高さもさることながら、自分たちの学校の環境に目を配り、自分たちの手で改善していこうとする気持ちがうれしかった。

学校では集団生活を通して「社会性」を育てることを大切にしている。その社会性の基礎となるのが「自己有用感」だ。自己有用感とは、集団の中で自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識できる感情である。人の役に立っている、誰かに喜んでもらっていると思える体験の積み重ねで育まれていく。先の環境美化委員、情報委員の子もたちもそれぞれに自己有用感を高めてくれたに違いない。

1学期終盤、一人一人が自身の成長や自己有用感を自覚できる学期末であることを願う。